様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年４月３０日現在

機関番号：32670
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22320060
研究課題名（和文）構造主義の残滓としての英国批評の国際的再検討ーラスキンからウィリアムズまで

研究課題名（英文） Writings Structuralism Has Left as Residuals: An International Re-examination of British Critics from John Ruskin to Raymond Williams

研究代表者
川端　康雄（KAWABATA YASUO）
日本女子大学・文学部・教授
研究者番号：80214683

研究成果の概要(和文)：　本研究は、人文学研究に独自の視点で貢献を行うことを目的として、近年の英文学研究における批評理論の展開をふまえつつ、レイモンド・ウィリアムズの批評を直接の研究対象とするのと同時に、彼の著作を手掛かりにしてジョン・ラスキン以後の近現代の英国批評を再検討した。その際、これまでの批評史の支配的な枠組からこぼれ落ちてきた「残滓的なもの」に注目した。狭義の批評のみならず、近現代の英国批評が保持していた総合性への指向をふまえた学際的な批評の再検討をも併せて進めた。

研究成果の概要（英文）：Our study has re-examined British critics from John Ruskin to Raymond Williams, based on the recent development of critical theory in English Literature, for the purpose of contributing to studies in humanities from an original point of view. In treating both writings of Williams and, guided by them, those of other British critics in the nineteenth and twentieth centuries, we have focused on the “residuals” which have been somehow dropped from the dominant paradigm of the history of criticism or, to put it in another way, left by Structuralism. We have made an international re-examination of these critics, too, having its basis on the orientation towards totality or wholeness preserved by them in the modern era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
２０１１年度	2,300,000	690,000	2,990,000
２０１２年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
年度			
総　計	8,500,000	2,550,000	11,050,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：レイモンド・ウィリアムズ　モダニズム　ネオリベラリズム　ユートピア　英国批評　ジョン・ラスキン　ジョージ・オーウェル　ウェールズ

１．研究開始当初の背景

英米圏の文学批評史の典型は、20 世紀初頭に確立したリベラル・ヒューマニズム、そしてそれを否定する形で 20 世紀半ばに登場した構造主義・ポスト構造主義・脱構築批評による切断を経て、その後のフェミニズム、ジ

ェンダー批評、ポストコロニアリズムといった政治的批評に「洗練」が加えられて展開してきたとされる。その一方で、こうしたポスト構造主義的「洗練」が行き詰まりを迎えてしまったのではないか、という疑義も提出されるようになっている。

例えば、こうした「(ポスト) 構造主義」以降における批評理論の旗手のひとりとされてきたテリー・イーグルトンが、近著において「理論の終わり」について論じ(Terry Eagleton, *After Theory*, 2003)、また自らがかつて構造主義以前のものとして否定した、例えば「共通文化」あるいは「生」といった問題系に回帰していること(*The Idea of Culture*, 2000; *The Meaning of Life*, 2007)は、この「行き詰まり」を明確に示す現象である。演劇研究においても同様の動きが見られ、ポスト構造主義的知見を駆使するパフォーマンス・スタディーズの中心性への懐疑が提出されると同時に「ドラマ／シアター」という人文学的蓄積を再考する動きが浮上している(Simon and Shepherd, *Drama/Theatre/Performance*, 2004)。

ただしこの潮流は、単純なリベラル・ヒューマニズムへの回帰となりかねない要素をもっている。その一方で、(ポスト) 構造主義的批評理論の行き詰まりという状況は、構造主義以前の実証主義的な歴史主義への回帰も生じさせている。別な言い方をすれば、一方は「文学」に、もう一方は文献の掘り起こしに限定された「歴史」に閉じこもり、社会的・政治的に意義ある批評の位置が失われつつあるという状況が存在するのである。

本研究はそのような「袋小路」を打開するために、こうした行き詰まりの前提となっている、「(ポスト) 構造主義という切断」の批評史そのものを疑問に付すことを出発点とした。その際に、Eagleton 自身が一度は「ヒューマニズム」「ポピュリズム」といった名の下に否定し去り、近年はそこへと結局は回帰しているレイモンド・ウィリアムズの視座を活用しつつ、英国批評を再検討することを、本プロジェクトは企図した。これをウィリアムズ自身の用語で言いかえると、批評史における「残滓的なもの」(「支配的」「勃興的」なものと共に、現在の文化の全体性をなす重要な部分であり、単に過去の名残りというだけではなく勃興的なものの出現をうながす可能性のあるもの) を、批評の新たな展望のために再検討するということになる。

２．研究の目的

本研究は、近年の英文学研究における批評理論の展開をふまえつつ、ジョン・ラスキンからレイモンド・ウィリアムズまでの近現代イギリスの批評を再検討することによって、人文学研究に独自の視点で貢献を行うことを目的とした。その際、本研究の特色は、下記①②に大別される。

①文学批評における〈残滓的なもの〉に着目することによる、新たな展開の模索。

本研究は一定の臨界点に達したとみられる文学批評理論に新たな展望を与えるために、これまで支配的な批評史パラダイムからこぼれ落ちてきた「残滓的なもの」を、あえて精査することを、その第一の特徴とする。

②レイモンド・ウィリアムズの再評価と批判的検討。

①の目的を達成するために、本研究は英国の批評家・作家であるレイモンド・ウィリアムズを柱として研究を展開した。これは、ウィリアムズを直接の研究対象とすることと同時に、ウィリアムズの著作を導きの糸にして 19 世紀中盤から 20 世紀中盤にかけての英国批評を、英国内にかぎらずとくにヨーロッパ大陸系の批評・哲学との影響関係・同時代性も考慮しつつ再検討することを意味している。

３．研究の方法

本研究は、各研究者の文献研究を基礎とし、それを定期的な研究会、シンポジウムなどによって共同の検討に付すという手順で行われた。文献研究については、購入する以外に、国内外の図書館・アーカイヴにおける調査を行った。また、これまで「レイモンド・ウィリアムズ研究会」という形で定期的な研究会を行ってきたが、それをさらに充実した形で継続した。具体的には、ウィリアムズ研究の進展著しい英国の研究者を招いた日本での国際シンポジウムの開催、英国における国際シンポジウム、その他雑誌媒体における企画、ウィリアムズ研究会の機関誌としてすでに第 1 号を発行した『レイモンド・ウィリアムズ研究』のさらなる充実・発行を行った。

４．研究成果

本研究の 1 年目に当たる 2010 年度は、海外より研究者三名を招聘し、9 月 23 日にプレ・セミナー (Raymond Williams in the 1950s)、同月 24 日にシンポジウム (Fiction as Criticism/Criticism as a Whole Way of Life: Raymond Williams in Transit II) を開催した。この国際的なプレ・セミナー、シンポジウム (使用言語 : 英語) の開催によって、Williams の知的形成のプロセス解明するための、重要な示唆を得ることができた。とくに、初期ウィリアムズ (*Culture and Society* まで)の形成、ウィリアムズ伝記的資料についての第一人者であるダイ・スミス教授による、ウィリアムズとウェールズの関係性についての報告は、従来のウィリアムズ研究における盲点をあぶり出すものであり、この観点を代表者、分担者間のあいだで共有できたこと

は、今後の研究の進展に大いに資するものと考えられる。

また、ヨーロッパ思想に造詣の深い専門家の知見を得るべくインタヴューを行ったことで、20 世紀前半の英国批評における社会信用論という盲点となりやすい系譜、そしてこの系譜とウィリアムズの仕事の関連性について、欠くことのできない視点を得ることができた。同時に、こうした系譜を溯行する際には、現代の諸問題との関連性を念頭に置くことが必要不可欠である、という視点も得ることができ、本年度内の研究の進行におおいに寄与したものと考えられる。

本研究の 2 年目にあたる 2011 年度は、前年度の国際シンポジウムおよび資料調査の結果を受けて、各自、および集団的に研究内容を検討した。

2011 年 3 月 11 日の大震災と福島第一原子力発電所の事故が否応なく引き起こした事態、およびそれに直面しての社会的経験は、本研究のキーパーソンである批評家レイモンド・ウィリアムズの系譜学的な作業をよりクリティカルなものとして読み直す契機となった。10 月 9 日に関西学院大学で行った研究会では、名古屋大学工学部助教で原子炉物理学（臨界安全）を専門とされる遠藤知弘氏を迎えて「原子力、社会、そして文化」と題する討議を行った。これは研究誌『レイモンド・ウィリアムズ研究』第 3 号（2012 年 3 月発行）に採録した。

また英国の The Raymond William Society の研究誌である *Key Words: A Journal of Cultural Materialism* の第 9 号を“Raymond Williams in Japan”と題する特集として、そこに本研究のメンバーの 3 名（本報告の「5、主な発表論文等〔研究発表〕のリストを参照）に 2011 年度の日本女子大学での国際シンポジウムの発表者（山田雄三・近藤康裕）の論文を加え、併せて 5 本の論文を寄稿し、日本におけるレイモンド・ウィリアムズ研究の現状の一端を英語圏の研究者にむけて発信することができた。そこでは同じくシンポジウムに招聘したスウォンジー大学（連合王国）のダニエル・ウィリアムズ教授とダイ・スミス教授がそれぞれ特集の序文と巻末のコメントを担当している（前者は特集のコーディネータでもあった）。

2009 年に端緒を開いて以来深めてきた国際的な研究協力の関係を継続しつつ、2012 年度にはスウォンジー大学で次なるシンポジウムの計画があり、その準備として、12 月 26 日と 2 月 18 日に行った研究会（それぞれ一橋大学と関西学院大学丸の内キャンパスで開催）ではウェールズ文学をめぐる討論を行って問題点の共有を図った。

本研究の最終年度に当たる 2012 年度は、“Long Revolutions in Wales and Japan: Raymond Williams in Transit III”と題するカンファランスを、2012 年 11 月 2 日にスウォンジー大学のディラン・トマス・センターに於いて開催した。同カンファランスには、本研究課題におけるこれまでの成果を最終的な検討に付することを目的とした。本研究課題は狭義の（現代的な意味での）批評の再検討だけではなく、20 世紀前半の英国批評が保持していた総合性への指向を踏まえた「学際的」な批評の再検討も含んでおり、両者の成果を検討できるように図った。その際、昨年度、専門的な知見の提供を依頼した西亮太氏（一橋大学博士課程院生）にも、上述のカンファランスへの同席を依頼し、研究協力者として本研究課題に加わってもらった。年度末には同カンファランスのプロシーディングズを発行した。

以上の国際カンファレンスおよび国内の研究会（2012 年 4 月 22 日、8 月 31 日、9 月 1 日、12 月 30 日、併せて 4 回開催）を中心とした課題遂行作業と並行して、適宜別個に、国内外の学会等での口頭報告、活字での成果公表をおこなった。

最後に研究代表者および研究分担者の研究成果をまとめておく。

川端康雄は研究の統括を行いつつ、ジョン･ラスキン、ウィリアム･モリスからジョージ･オーウェルをへてウィリアムズに至る批評の系譜について研究を進めた。その成果を何篇かの論文にまとめたが、それらを含む論集『葉蘭をめぐる冒険――イギリス文化・文学論』（みすず書房、2013 年）は、ラスキン、モリス、オーウェルらのテクストを共通文化の視点から読み直すことを主眼とした。ラスキンについては、大著『ヴェネツィアの石』のなかで社会批評の観点からもっとも重要な部分と評価される第 2 巻第 6 章を訳出し、『ゴシックの本質』（みすず書房、2011 年）として刊行した。また日本におけるモリス研究の代表的存在といえる小野二郎（1929-82）の没後 30 年に際してその論考を独自編集して『ウィリアム･モリス通信』（みすず書房、2012 年）として刊行した。

大貫隆史は、レイモンド・ウィリアムズによる演劇論、ならびに、同じくウィリアムズによるキーワードの系譜学について研究を進めた。ウィリアムズは通説に反して、専門用語を駆使する難解な思想家・批評家ではなく、日常的な言葉と専門的な用語を常に往復する書き手であることが、研究過程で明らかになってきた。言い換えると、ウィリアムズは、専門家（例えば文学研究者）と非専門家との分断に意識的な書き手であったわけだが、その具体的な著述についての考察は、河野真太郎との共著のもの含め、『Web 英語青年』誌上に公表されたものに含まれている（「２１世紀の生のためのキーワード―新し

い批評の言葉」)。また、ウィリアムズのライティングの残滓的部分として、演劇含め文学とコミュニケーションという問題系があることが徐々に判明してきたが、これについては、報告“Communication and Community: Raymond Williams's Writings in the 1950s”(Raymond Williams in the 1950s: A pre-seminar)、論文“Translation and Interpretation: Raymond Williams and the Uses of Action,”*Key Words: A Journal of Cultural Materialism* 9 (2011) 100-111 を成果としてあげることができる。

河野真太郎はレイモンド・ウィリアムズおよびイギリスの文化論の系譜の研究を進めた。その成果は何編かの論文にまとめたが、その集大成として著書『〈田舎と都会〉の系譜学——二〇世紀イギリスと「文化」の地図』（ミネルヴァ書房、2013 年）を出版した。この著書は 2013 年の出版であるが、収録した論文の大部分は 2011 年までに執筆したものである。その後の研究期間においては、上記著書で得られた知見をもとに、20 世紀イギリスの文化と社会を、「成長」「教育」というキーワードのもとに考察する新たなプロジェクトに取りかかった。その部分的な成果は論文「成人教育というユートピア——レイモンド・ウィリアムズと「分断」の系譜学」*New Perspective* 196 (Autumn/Winter 2012): 5-19 や「おれたちと私たちはいかにして貧しさを失ったのか？——「世代問題」と文化と社会の分離」『言語社会』7（2013 年 3 月）：151-64 という形で発表した。

遠藤不比人は 2010 年度は『死の欲動と現代思想』という翻訳を出版し、平成 23（2011）年度は単著『死の欲動とモダニズム』を出版した。2012 年度は在外研究のためロンドン大学に滞在し英国における精神分析受容を研究した。このテーマに関して 2012 年 7 月にモントリオールで口頭発表、2013 年 2 月から 3 月にかけて PhD の学生用の連続セミナーを行った。また批評理論としての精神分析に関しては 2012 年 5 月にソウル、同年 10 月にロンドン、2013 年 1 月と 2 月にマドリッドで口頭発表をした。またレイモンド・ウィリアムズと精神分析の関係性についてスォンジー大学で口頭発表をした。2012 年 5 月のソウルでの発表は英語論文として出版された。

鈴木英明は、2010 年度に翻訳書（共訳）『大義を忘れるな』（ジジェク著、青土社）を出版し、日本ワイルド協会主催のシンポジウムにおいて「オスカー・ワイルドにおける疎外論の不可能性と不可避性」という題で発表を行った。2011 年度には日本英文学会関東支部・大会シンポジウムにおいて「回帰する『ダヴォス討論:カッシーラー対ハイデガー』」という題で発表を行った。また翻訳書（単訳）『ナショナリズムと想像力』（スピヴァク著、青土社）を出版した。2012 年度は日本英文学会・大会シンポジウム第四部門において、「共同体とアレゴリー」という題で発表を行い、論文「ワイルドと政治」（富士川義之ほか編著『オスカー・ワイルドの世界』開文社出版に所収）を発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 24 件）

① 川端康雄、リヴァイアサンに抗って——オーウェル、ウィリアムズ、*Politics and Letters*（1947-48）、関東英文学研究、査読有、第 5 号、2013、pp. 1-9 (81-89)
② 河野真太郎、おれたちと私たちはいかにして貧しさを失ったのか？——「世代問題」と文化と社会の分離、言語社会、査読無、7、2013、151-164
③ 川端康雄、２１世紀の生のためのキーワード——新しい批評のことば 第二十三回「芸／芸術」、Web 英語青年、査読無、157 巻 11 号、2012、22-33
④ 川端康雄、A Narrative of Unsolved Cases: A Reading of *The Fight for Manod*, *Key Words: A Journal of Cultural Materialism*, 査読有, 9, 2011, 134-143
⑤ 河野真太郎、21 世紀の生のためのキーワード——新しい批評の言葉　第二十一回「持つ」、Web 英語青年、査読無、157 巻 9 号、2011、15-26
⑥ 大貫隆史、２１世紀の生のためのキーワード——新しい批評の言葉　第十五回「悲劇」（下）、Web 英語青年、査読無、157 巻 3 号、2011、24-43
⑦ 大貫隆史、２１世紀の生のためのキーワード——新しい批評の言葉　第十四回「悲劇」（上）、Web 英語青年、査読無、157 巻 2 号、2011、28-46
⑧ 大貫隆史、Translation and Interpretation: Raymond Williams and the Uses of Action, *Key Words: A Journal of Cultural Materialism,* 査読有、9, 2011, 100-111
⑨ 鈴木英明、21 世紀の生のためのキーワード——新しい批評の言葉　第十六回「個人」、Web 英語青年、査読無、157 巻 4 号、2011、13-22
⑩ 鈴木英明、オスカー・ワイルドにおける疎外論の不可能性と不可避性、オスカー・ワイルド研究、査読有、第 12 号、2011、65-71
⑪ 河野真太郎、21 世紀の生のためのキーワード———新しい批評の言葉　第十三回

「自由」、Web 英語青年、査読無、157 巻 1 号、2011、28-40

⑫ 河野真太郎、『ハワーズ・エンド』とグローバル・イングランド文化の出現、言語社会、査読無、 5 号、2011、96-112

⑬ 河野真太郎、Soseki Natsume, Raymond Williams, and the Geography of "Culture," *Key Words: A Journal of Cultural Materialism*, 査読有, 9, 2011, 83-99

⑭ 大貫隆史、21 世紀の生のためのキーワード———新しい批評の言葉　第十二回「社会」、Web 英語青年、査読無、第 156 巻第 12 号、2011、53-70

⑮ 河野真太郎、21 世紀の生のためのキーワード———新しい批評の言葉　第十一回「成長」、Web 英語青年、査読無、第 156 巻第 11 号、2011、36-47

⑯ 鈴木英明、21 世紀の生のためのキーワード———新しい批評の言葉　第六回「フェチ」、Web 英語青年、査読無、第 156 巻第 6 号、2010、33-44

⑰ 川端康雄、書評 Rachel Teukolsky, *The Literate Eye: Victorian Art Writing and Modernist Aesthetic* (Oxford UP, 2009), ヴィクトリア朝文化研究、査読無、第 8 号、2010、58-62

⑱ 川端康雄、『ケルムスコット・チョーサー』（ケルムスコット・プレス版『チョーサー作品集』）について、図書館だより（日本女子大学図書館）、査読無、第 138 号、2010、2-3

⑲ 遠藤不比人、21 世紀の生のためのキーワード———新しい批評の言葉　第五回「戦争」、Web 英語青年、査読無、第 156 巻第 5 号、2010、43-56

⑳ 大貫隆史・河野真太郎、21 世紀の生のためのキーワード———新しい批評の言葉第四回「マネジメント」、Web 英語青年、査読無、第 156 巻第 4 号、2010、29-39

㉑ 河野真太郎・大貫隆史、21 世紀の生のためのキーワード———新しい批評の言葉第三回「コミュニティ」、Web 英語青年、査読無、第 156 巻第 3 号、2010、36-47

㉒ 河野真太郎・大貫隆史、21 世紀の生のためのキーワード———新しい批評の言葉第二回「コミュニケーション（下）」、Web 英語青年、査読無、第 156 巻第 2 号、2010、42-49

㉓ 大貫隆史・河野真太郎、21 世紀の生のためのキーワード———新しい批評の言葉第一回「コミュニケーション（上）」、Web 英語青年、査読無、第 156 巻第 1 号、2010、2-10

㉔ 鈴木英明、回帰するシネマ覚書、レイモンド・ウィリアムズ研究、査読無、第 2 号、2011、117-125

〔学会発表〕（計 14 件）

① 鈴木英明、共同体とアレゴリー——Paul de Man の未発表草稿を中心に、日本英文学会　シンポジウム第 4 部門、2012 年 05 月 26 日、専修大学生田キャンパス

② 遠藤不比人、A Reading of Freud through Williams: An Actual/Affectual Residual and the Long Revolution、Long Revolutions in Wales and Japan: Raymond Williams in Transit III、2012 年 11 月 02 日、Dylan Thomas Centre, Wales

③ 大貫隆史、A Short Talk: Culture and Society after 3.11、Long Revolutions in Wales and Japan: Raymond Williams in Transit III、2012 年 11 月 02 日、Dylan Thomas Centre, Wales

④ 大貫隆史、ロレンスを読むウィリアムズを読む——個人、社会、ネイション、日本ロレンス協会第 42 回大会 若手シンポジウム　ロレンスのテクストの可能性、日本ロレンス協会第 42 回大会、2011 年 6 月 26 日、神戸大学鶴甲第 1 キャンパス

⑤ 鈴木英明、回帰する「ダヴォス討論：カッシーラー対ハイデガー」、日本英文学会関東支部第5回大会シンポジウム　冷戦期ナショナリズムの諸相、2011 年 11 月 5 日、慶應義塾大学日吉キャンパス

⑥ 鈴木英明、アンティゴネーの視座、TAGTAS 円卓会議「国家と演劇 1」、2011 年 1 月 16 日、座・高円寺

⑦ 鈴木英明、『アンティゴネー』——〈女〉の享楽と倫理、TAGTAS フォーラム、2011 年 1 月 9 日、スペース・カンバス

⑧ 川端康雄、ジョン・ラスキンとウィリアム・モリス——社会改良の夢と挫折、フェリス女学院創立 140 周年記念、英文学科シンポジウム「1870——ヴィクトリア朝文芸と社会改良」、2010 年 12 月 4 日、フェリス女学院大学山手キャンパス

⑨ 河野真太郎、ベーシック・インカム下の人間の魂？——オスカー・ワイルドと自由の系譜、日本ワイルド協会第 35 回大会シンポジウム「ワイルドの「批評」を批評する」、2010 年 12 月 4 日、慶應義塾大学三田キャンパス

⑩ 鈴木英明、ワイルドにおける疎外論の不可能性と不可避性、日本ワイルド協会第 35 回大会シンポジウム「ワイルドの「批評」を批評する」、2010 年 12 月 4 日、慶應義塾大学三田キャンパス

⑪ 遠藤不比人、Tony Pinkney's Reading of Raymond Williams's Reading of D.H. Lawrence, Raymond Williams in the 1950s: A pre-seminar, 2010 年 9 月 25

日，日本女子大学目白キャンパス

⑫ 鈴木英明、Arnoldian State as a Whole Community: The State and the Idea of Community in Raymond Williams's Culture and Society, Raymond Williams in the 1950s: A pre-seminar, 2010 年 9 月 25 日、日本女子大学目白キャンパス

⑬ 河野真太郎、*Border Country* and Growth, Raymond Williams in the 1950s: A pre-seminar, 2010 年 9 月 25 日，日本女子大学目白キャンパス

⑭ 大貫隆史、Communication and Community: Raymond Williams's Writings in the 1950s, Raymond Williams in the 1950s: A pre-seminar, 2010 年 9 月 25 日，日本女子大学目白キャンパス

〔図書〕（計 5 件）

① 川端康雄、葉蘭をめぐる冒険――イギリス文化・文学論、みすず書房、2013、326

② 河野真太郎、〈田舎と都会〉の系譜学――20 世紀イギリスと「文化」の地図、ミネルヴァ書房、2013、270

③ 鈴木英明、オスカー・ワイルドの世界、開文社出版、2013、担当章「ワイルドと政治」439-448

④ 遠藤不比人、死の欲動とモダニズム――イギリス戦間期の文学と精神分析、慶應義塾大学出版会、2012、292

⑤ 川端康雄・大貫隆史・河野真太郎・遠藤不比人他、愛と戦いのイギリス文化史 1951-2010 年、慶應義塾大学出版会、2011、486 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

川端　康雄（KAWABATA YASUO）
日本女子大学・文学部・教授
研究者番号：80214683

(2)研究分担者

遠藤　不比人（ENDO FUHITO）
成蹊大学・文学部　・教授
研究者番号：30248992

河野　真太郎（KONO SHINTARO）
一橋大学・商学研究科・准教授
研究者番号：30411101

大貫　隆史（ONUKI TAKASHI）
関西学院大学・商学部・准教授
研究者番号：40404800

鈴木　英明（SUZUKI HIDEAKI）
日本女子大学・文学部・研究員
研究者番号：70299965

(3)連携研究者

（　　）
研究者番号：